

<b>Title</b>	ジョージ・エリオットの心の鏡とその映像：「フロス河畔の水車場」の場合
<b>Author</b>	丹羽, 千年
<b>Citation</b>	人文研究. 13 卷 4 号, p.413-431.
<b>Issue Date</b>	1962
<b>ISSN</b>	0491-3329
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学文学会
<b>Description</b>	

Placed on: Osaka City University Repository

## ジョージ・エリオットの心の鏡とその映像

—「フロス河畔の水車場」の場合—

丹 羽 千 年

「これまで試験の答案や大学生の論文などで、『ジョージ・エリオットは最初の現代的小説家である。』という主張に余りよく出くわすので、何処から来ているのかと思つたら、Lord David Cecilの*Early Victorian Novelists* だということ<sup>(1)</sup>がとうとう判つた。」とF. R. Leavisは皮肉な口吻で、その*The Great Tradition*の立論の足掛りとしていふ。

周知の様に、セシルは右の著書でディケンズから始め、サッカレイ、ブロンテ等を経て、エリオットに終っている。

Walter Allenはその*The English Novel*の第五章を‘The Early Victorians’としコリンズに終り、第六章を‘The Later Victorians’としてエリオットから始めハーディに終り、第六章を‘The Novel from 1881 to 1914’としてヘンリ・ジェイムズから始めていることは興味がある。勿論、文学、小説の流れにおける時代区分は、概念的であり、時に便宜的でもある。現にセシル自身、G・エリオット論の冒頭で「しかし、実のところ、彼女の小説は、上述の如何なる作家よりも我々に近いものであつて、最初の現代的小説家と当然呼ばれて然る可きものである。フィールディングに始まる英国小説の第一期はトロロップに終り、ヘンリ・ジェイムズ、メレディス、ゴールズワージー、ウエルズの時代、そして今日なお続いている第二期は、G・エリオットに始まるのである。」<sup>(2)</sup>と云う。この区分も又、概念的であつて、別の意味から、上述の様にリーヴィスの修正を受けることになる。<sup>(3)</sup>そのリーヴィスの様にエリオットを超時代的に、オーステインに始まりヘンリ

・ジェイムズ、コンラッド、D・H・ロレンスに至る英国小説の一大伝統の中に捉えることも可能であろう。更に、最後の作 *Daniel Deronda* のうち、見劣りする部分を削除し、残りのテーマを *Gwendolen Harleth* と名付けて、これを激賞するという余りにも鮮かな批評も可能であろう。のみならず『ゲンドウレン・ハーレス』を読まなかったならば、恐らくヘンリ・ジェイムズは *The Portrait of a Lady* を書かなかったであろうと言う<sup>(4)</sup>。或は又、*Basil Willey* は *Nineteenth Century Studies* で、「(1)の書物では十九世紀の英国の思想と信仰の主流の幾つかを追求しようと試みているのだが、ジョージ・エリオットがどうしてもその中心を占めなくてはならない。恐らく、この時代の如何なる英国の作家も、又、確かに、如何なる小説家も、彼女程この世紀を充分に要約して<sup>(5)</sup>いるものはない。彼女の発展過程は、この時代の最も決定的な傾向の模範であり、彼女の知性の伝記は、その図式である」と述べている。それぞれに立場がある訳であるが、結局、ジョージ・エリオットはヴィクトリア朝を最も代表する小説家であり、その作品には現代小説への発展の萌芽を有するものと言つて過言でないであろう。

W・アレンは彼女の最初の長篇小説 *Adam Bede* の出版された一八五九年及びその前後の小説界の雰囲気を大体次の様に説明する。<sup>(6)</sup>この同じ年に *Meredith* の本格的小説の最初のもの *The Ordeal of Richard Fevrel* が出版され、この両者は、同年に出た *Dickens* の *A Tale of Two Cities*, *Thackeray* の *The Virginians*, *Trollope* の *The Bertrams* と著しい対照を示している。英国のみならず、一八五〇年代、六〇年代には、ヨーロッパの小説界に一つの新しい時代が生まれつつあったことが指摘出来る。*Turgenev* の *Sportsman's Sketches* の英訳、*Tolstoy* の *Sevastopol*, *Flaubert* の *Madam Bovary* が五五年であり、*Dostoevsky* の *The House of the Dead* が六一年、*Turgenev* の *Fathers and Sons* が六三年に出版されている。彼らが直接エリオットに影響を与えたとは考えられないにしても、この様な新しい小説を生み出す大きな運動の中に、エリオット、メレディスの小説が含まれていることを逆に当時をふりかえって見ることによって知り得るのではなからうか。当時の英国の作家は時に説教者、改革者であり、常に大衆の娯楽を事とする作家として自ら考えていたに反し

て、ヨーロッパの作家達には道徳的、審美的真面目さがあつたが、それは単に、才能の問題ではなく、彼等が自らに提起する目的に存するものである。ジョージ・エリオット、メレディスの小説と共に、英国小説には、芸術性並びに道徳性という目的、意図の真面目さが意識的に入って来ていると言へる。

彼女の作品は、一八五八年に出版された短篇集 *Scenes of Clerical Life* に始まり *Adam Bede* (1859), *The Mill on the Floss* (1860), *Silas Marner* (1861) を前期、*Romola* (1863), *Felix Holt* (1866), *Middlemarch* (1872), *Daniel Deronda* (1876) を後期と分けるのが常識的である。尤も、その評価はこれまで決して一定したものではなかった。彼女の存命中は、その各々の作品が出版されることに非常な好評を受けていたが、その後、名声は急激に衰えて、早くは七七年 Swinburne (*Note on C. Browné*), Henley (*Views and Reviews*) 等の悪評を受け、一八九五年 G. Saintsbury は *Corrected Impressions* の中で、「彼女の作品は今後も読まれるかも知れないが、ここ数年前から多かれ少かれ、現代の批評鑑賞の対象から外れてしまった」と言ひ、一九〇二年 Leslie Stephen は *English Men of Letters Series* の *George Eliot* で「彼女の能力の衰微は、後期の始め『ロモラ』から始まるという同時代の見解を受け入れ、その原因を「魅力にかける」ことに求めている。尤も、例外はあつた様であるが、L. スティーヴンのその説は「彼女は最初の四年間に完全な芸術作品を書いた。『ロモラ』が彼女の衰微を劃するもので、『ミドルマーチ』で、その衰えは一層はつきりし、最後の全く退屈な『ダニエル・デロンダ』において、その極に達した」ところ W. J. Dawson (*The Makers of English Fiction*, 1905) によって裏付けされていると言われる。処で、近年その再評価の口火をきつたのは、一九二五年に出版された *The Common Reader I* で Virginia Woolf が「彼女の力が衰えた訳ではない。と言うのは、我々の考えでは、円熟した『ミドルマーチ』において、その力は最高に達した。この作こそ、不完全な点はあるにしても、大人の為に書かれた数少い英国小説の一つという可き傑作であ

る<sup>(8)</sup>』と述べていることであろう。ヴィクトリア朝のすぐれた批評家L・ステイーヴンと、その子ウルフのエリオットに対する評価の対象が正に反対であることは甚だ興味深いものがある。このウルフの評言の中の「円熟した」ということと、ステイーヴンの「魅力にかける」ことを捉えて、後期の作における円熟性を称揚するために、魅力にみちた前期の作品の「未熟さ」を指摘し、それらの価値を低める可きであるとして、F・R・リーヴィスは前期、後期の作品の間に二者択一を迫る様に思われる。更に Arnold Kettle は *An Introduction to the English Novel I* の中々『ミドルマーチ』を、リーヴィスの言葉を引用し、又これに条件をつけながらも、最高の作として採り上げている。そこに十九世紀の影響下にある批評家と、現代の批評家との態度に、判然した区別が見られるのであり、後期の作、殊に『ミドルマーチ』或は、リーヴィスの名付ける『ゲンドウレン・ハーレス』が現代小説に一層密接な関係があり、現代の読者に訴える所があることを物語るものと言えよう。

これら後期の作品に対する前提として、前期の作品、特に『フロス河畔の水車場』をとりあげたいと思うのは、彼女の作家生活が比較的に晩く始まり、小説家としての態度が殆ど最初から確立されていること、又、この作品のマギー (Maggie) の中に、最も彼女の自叙伝的要素を含んでいること、及び、セント・オッグズ (St. Ogg's) の町に、社会的背景を明確に捉えている点、次の作『サイラス・マーナー』よりも後期の作品に近く、その長所、短所にヴィクトリア朝作家としての彼女の特質と、同時に後期作品への発展の萌芽、及びヴィクトリア朝末期、更に二〇世紀小説への発展の可能性を包蔵していると考えられるからである。

『アダム・ビード』十七章で、「物語の筆をしばしとどめて」、小説家の目的はありきたりなものを忠実に再生することにあるとし、「人間や事物を、私の心の鏡に映るがままに忠実に話すことである。その鏡は、勿論、完全なものではな

い。輪郭が時にはゆがみ、映る影がかすかになるとか、乱れることもある。しかし、私は宛も私が証人席にあって、誓をたてて自分の経験を述べる様に、その映像がどの様なものを、私に出来るだけ正確に伝えなくてはならないと思う。』  
と言ひ、更に、「私はこの単純な物語をすることに満足を感じる。事物を實際以上によく見せようと努めることもなく、只々、虚偽のみを恐れるばかりである。が、その真実が如何にむつかしく、虚偽が容易であることか。……高貴な心の人々は軽蔑するが、あの多くのオランダ派の絵画を見て喜ぶのは、この類稀れな高貴な真実性のためなのだ。」と述べている。彼女にとって、神々しい美も勿論よいにしても、人間の深い同情にあるもう一つの美、貧しく卑しい平凡極まる人々の中にある本当のペイソスを愛す可きものと考ええる。従つて、彼女が人間性は愛す可きものだという結論に到達したのは、——人間性の深い悲哀、その敵かな神秘の数々について知る様になつたのは、多かれ少かれ平凡な卑しい人々の間に住むことによつたのだ、としている。

然し、この様な考えは何も『アダム・ビード』に始まつたものではなく、前作の最初の短篇小説集の中、例えばエイモス・バートン (Amos Barton) についても、彼は決して理想的でも異例の性格の所有者でもない。全く際立つた所のない、ありきたりの人間である。……しかし、こういう平凡な人間は皆、良心を持ち、いたましくも正しい事をしようとする高貴な刺戟を感じ、言うに言われぬ悲しみを抱き、神々しい程の喜びを持つ。初子に心傾け、死者にはかない悲しみを捧げる。この様な無意義さの中に悲哀があり、彼らの人目につかぬ狭い生存を、彼らがわけ持っている人間性の輝かしい可能性と比較して見ることにペイソスがあるのではなからうか。濁つた灰色の目からこの世を見、全く普通な口調で話す人間の魂の経験の中にある詩情や哀感、悲劇や喜劇を、我々共に知ろうと思う時、必ず言葉に表わせぬ程得る所があるものなのだ、と説明する。

エリオットが描こうとする人物は、善玉、悪玉ではなく、往々にして、善と悪との混合した性格の持主、本来高貴な心を持ちながら、時に過ちを犯す人間である。最初の短篇にしても、『ギルフィル氏の恋物語』 ("Mr. Gilfil's Love-Story")

のカテリーナ (Caterina) は嫉妬の余り逆上して、恋人を短剣で殺そうとし、『ジャネットの悔』 ("Janet's Repentance") のヒロインは日々の心の苦しみを酒に紛らす女性である。一種のお伽話『サイラス・マーナー』が、最も欠点の少い小さな傑作と称せられるのは、サイラスその他の人物の性格創造に負う所が大きい。又、『アダム・ビード』のポイザー夫婦 (the Poyzers) は勿論、ドニソーン (Donnihorne) やヘティ (Hetty) の方がアダムやダイナ (Dinah) よりも生々としているのは、後の二人に理想化があるためで、彼等が僅かに人間らしい弱みを示す時、興味を惹く。エリオット自ら、「もし芸術が人間の同情心を広くするのでなければ、道徳的に何らなす所はない。……私が私の著作によって念願する唯一の効果は、読者が、苦闘し過ちを犯す人間であるという明白な事実以外にはあらゆる点で異った人々の苦痛や喜びを一層よく想像し、感ずることが出来る様になるということです。」<sup>(10)</sup> と言う時、彼女の小説芸術観の根底が示されている様に思える。ディケンズと比較して、カザミアンが「彼女においては、ディケンズの熱情的憐憫が、知的な同情に変わっている。彼女は平凡な生活の紛糾を丹念にときほぐし、それを理解し、同情によってそれを再生さすことを好んだ。」<sup>(11)</sup> と言う様に、上に述べた点に、彼女が熟知していた中部地方の田園、町の緻密な背景描写と相俟って、リアリズム追求、芸術的リアリティを稜ようとする態度が窺える。

然し、上述の様な小説論その他夥しいコメントが彼女の小説の中にあるという事実自体、小説の統一されたイリュージョンを害うことは否定出来ないものであり、例えば「我々は彼のあとについて、さ程面白くもない家庭生活の雰囲気に戻るのにはよしにしましょう。」<sup>(12)</sup> などというディケンズ風の語り口と同様、当時としては如何ともなし難かったであろうか。J・ベネットはこの様なコメントは彼女の創作力についての不信感から来ていると説明するが、俄かには断じ難い。寧ろ、当時の読者に対する、彼女の知的な自信から来る啓蒙的な考え方の現れではなからうか。例えば、一八六〇年当時の手紙に、次の様な一節が見られるからである。「英国なら、どの様な無知な記者にしても、私を Miss Mullock の好敵手などと呼ばないであろう。——彼女は単なる小説読者にのみ読まれて、教養の高い人々には決して読まれない作家だから。」<sup>(14)</sup>

さて、この作品に描かれているマギー・タリヴァと、描いているエリオットのこの作品執筆当時の心の鏡が如何なるものであったかを知るために、メアリ・アン・エヴァンズ (Mary Ann Evans) からジョージ・エリオットへの思想、情緒の発展とその関係を辿って見なければならぬ。<sup>(15)</sup> 幼少の頃の彼女は熱烈な福音主義信仰家で、八才にして Miss Lewis の寄宿学校へ入った時、この先生の影響で、宗教的熱誠、自己抑制、献身を強請する教義に始めて接して以来、ほぼ二十二才に至るまで変ることがなかった。その間様々な逸話が伝えられているが、十九才の頃、ロンドンに出て、あの巨大なバベルの塔の喧騒に何ら喜びを感じ得ず、劇場を覗くことすらせず、部屋に閉じこもって読書に耽った程であったと伝えられ、又、当時の手紙に、ジョンソン博士が酒について、適度よりも全き禁酒の方が容易であると言った様に、彼女にとって適度よりも全き禁欲の方が容易であると書いていることから、マギーのあの苛酷なまでの自己抑制には、正にこの様なメアリ・アンに等しいものがあると言える。が、やがて、知的な明快さ、純粋性への欲求と、その反面、それよりもなお強い愛情、同情し、同化しようという芸術的衝動が生じると共に、熱烈な信仰に疑惑を抱く様になった。それに最も大きい影響を与えたのは、Charles Hennell の *An Inquiry concerning the Origin of Christianity* であった。当時、一八四一年十一月十三日の手紙は、始めてその間の消息を伝えるものであろう。「私の魂はこの数日、探求のうちでも最も興味あるものに夢中になっています。私の考えがどの様な結果になるか、私にも判りません。一恐らく、貴女を驚かすことになるでしょう。でも、私の唯一の願いは真実を知ることであり、唯一の恐れは誤りを固執することなのです」とミス・ルイスに書いており、三週間後には、「数学は明白、確実で不変のものであり、三角や円の性質は誰一人疑う者が無いのに、人間にとって遙かに重要な教義は論争の騒ぎや唸り声しか聞こえない骨の山の中に埋もれているのは悲しいことです」<sup>(17)</sup>とも書いている。勿論、マギーは年令的にも、心意発展の上からも、信仰喪失以前のメアリ・アンの姿であるが、エリオット



がこの作品を書いた頃までには、その知的な面における発展では、四三年 Strauss の *Leben Jesu* を繙訳、Comte, Spinoza の哲学に親しみ、Westminster Review の副編集者となり、当代の知性の代表とも言う可き Spencer, Mill, G. H. Lewes 等の他と親しく交わり、五三年 Feuerbach の *Essence of Christianity* を繙訳し、宗教的観点から、既に不可知論者であった。五四年には妻子と別居中であった Lewes と同棲するに至ったが、彼と結ばれる決意をした頃の彼女について、Lord Acton は「宗教教義を拒否した後は、彼女にとって宗教上の裁可などどうでもよいことであつたし、又、もし充分な理由があれば、英国の社会法をも無視しようという程の気持であつた」とさえ伝えてゐることを知る。それは一面、教義的宗教信仰から知的平静さへの解放と考えられるかも知れないが、後、七三年当時 Myers は、彼女が神はおよそ考えられず、永生不滅は信じられぬ。<sup>(19)</sup>しかし、義務は厳然として、且つ絶対的なものである、と恐ろしい程の熱意をこめて言つたという有名な話を伝えている。<sup>(19)</sup>

彼女が最新の思想から様々な影響を受けながら示した知的発展の過程は B・ウィリーが克明な跡付けをしていて余す所がない。彼の言う様に、最近のフランス、ドイツ理論、最近の教義解釈、人間学、医学、生物学、社会学の最も新しい成果に、彼女程並行して進んで行つた人はなかつた。<sup>(20)</sup>のであつて、其処に彼女を十九世紀思想の代表者とする理由があつたのである。ウィリーに言わせれば、彼女の思想、信仰の変遷過程のカーヴは福音主義キリスト教に始まり、疑惑を通じ、キリストの再解釈、そして人間宗教へ、即ち、神に始まり義務に終るのであり、彼女の少女時代の熱烈な福音主義信仰による精神的熱望は、その内容において、彼女の人間宗教への改宗以後変つたけれど、その熱望は相変らず残つており、あの恐ろしい程の熱意として、厳然たる義務として、——その要求する所は、その神の裁可がくずれたにも拘らず、否、その故にこそ、ますます絶対的なものとなつた義務の形で残つていたのである。<sup>(22)</sup>尤も、この様なエリオットの態度に正統主義の見地からするならば、勿論、異端の萌が入つて来ているとする T・S・エリオットの厳しい批判も又当然のことと思维られる。<sup>(23)</sup>

しかし、この様な最も新しい当時の諸学問を消化した彼女の知性が、その反面、彼女の優れた創造的想像力を決して害うことがなかつたことは、特に強調されねばならない。J・ベネットが、彼女のことを 'radical conservative'<sup>(24)</sup> と言ふ、B・ウィリーが 'conservative-reforming'<sup>(25)</sup> 或は W・アレンが 'radical Tory'<sup>(26)</sup> と言つたのは、結局、彼女の生涯をかけての探求が相反するものの調和、静的原理と動的原理、秩序と進歩、伝統と開化、情念と知能の統合であり、理想を尊重しながら、常態に堪え、新しいものを受け入れながら古いものに執着し、伝統の形態を批判しながらも、その核心を保持して行く態度にある。<sup>(27)</sup> 長年の知的探求の裏に、真心からの回想記憶を懐しみ憧れる愛情の深まりが見られることである。子供の頃の感情や生活にまつわる場所や人々の思出によって彼女の心情は生々とし、過去の時代を現在に回復することによって得られる進歩的知性と愛情の統合の上に彼女の作品が立脚している。

彼女の前期作品の総て、及び後期の『フリーリックス・ホールト』『ミドルマーチ』も、時代的には十九世紀初頭、二〇年代三〇年代の中部の田園、或は地方の市、彼女が親しく見たり、又親しい人達から聞いたたり、直接温かい心を以って回想することを得た世界が描かれている。殊にマギーの場合は、自伝的なものだけに、彼女の心の鏡は寧ろ透明なガラスとなり、彼女自身マギーと同化し、深い同情と洞察を以って、マギーを内面から描き、特にその前半において牧歌的背景の中に、気性の激しい自己中心的な兄トムへの愛を軸にして、彼女の成長過程が描かれ、最も詩的な要素に富んでいる。カザミアンがこの小説の最初の二百頁は恐らく彼女の書いた殆ど完璧に近いものと言ふのも充分首肯される。自分の腹立たしさを人形に釘を打ちつけて晴らしたりする程、<sup>(28)</sup> 自尊心も強く、仲々きかぬ気の彼女が最も恐れたことは、兄の留守中に兎の世話を怠って死なせる挿話にもある様に、兄に愛情を拒まれることであり、愛されたいという欲求が彼女の性格の中で最も強いものであった。が、やがて父親の無謀から破産の憂目に遭い、現実の世界に直面せざるを得なくなる。人並みはずれた知性を持ち、想像力に富み、情熱的な性格の彼女は、現実と書物と空想からなる三重の世界にあらゆる美しい喜ばしいものへの飽くなき憧れを抱く。それは「あらゆる知識に飢え、消え去って自分の身には近づきそうもない夢の様

な調を求めて聞き耳をたて、この神秘の人生の素晴らしい印象を総て継ぎあわせ、そこに魂の安住出来る様なものへの無意識的な盲目的な憧憬であった。<sup>(31)</sup>その時の心の空虚を満たしてくれたのが、他ならぬ Thomas à Kempis の *The Imitation of Christ* であった。……すべてを棄て去った以上、汝自身を捨てよ。汝自身より悉く去れ。自愛の心は何一つ留めるな。……汝自身を捨てよ。汝自身を諦めよ。さすれば汝内心の安らぎを楽しまん。……彼女の今までの楽しみに、宛もその楽しみがこの世に欠く可からざる中心をなしているが如く執着していたことの誤りを悟り、これこそ人生の秘密を解く鍵だと感じ、自己放棄こそ長い間空しくも憧れていた満足への第一歩だと確信するに至る。エリオット自身、この過去の敬虔な僧の言葉に含まれた最後の真理、自己放棄は、たとえ自ら進んで堪え忍ぶ悲しみであろうと、飽くまでも悲しみであることにマギーは気付いていなかったと注釈し、彼女が自己放棄にも幾分の誇張とわざとらしさ、誇りと激しさを与えていると批評しているが、少女時代の苛酷なまでの自己抑制へのエリオット自身の批判でもある。<sup>(32)</sup>

処で、マギーが直面せざるを得なかった世界がどの様なものであったかを知るために、此処で彼女の小説の有機的形態とも言う可き、J・ベネットの所謂、inner circle と outer circle との関係、<sup>(33)</sup>即ち、道徳的ダイレンマに捲き込まれる少数の個人と、そのダイレンマが解決される可き社会との関係について述べておく必要がある。それは彼女の小説の成否が一つにはそこにかかっている様に考えられるからである。前作品『アダム・ビード』でポイザー一家を中心とするヘイスロップの村で、美貌のヘティ・ソレルがアース・ドニソンに誘惑され、実直なアダム・ビードに結ばれようとして、結局、嬰兒殺しの罪を犯し、処刑されようとする。そのヘティを慰め改悟させたメソディスト信者ダイナ・モリスがアダムと結ばれる経過が展開されるが、その関係は『サイラス・マーナー』のラヴェロウ村の場合と同じく、その背景がこれらの事件の枠になっているに過ぎないのに反して、この作品においては、エリオットは違った接近法をとり、タリヴァ家はもとより、タリヴァの妹夫婦モス、マギーの母方の叔母達、所謂、誇り高きドドスン家の人々、更には、ゲスト家の人々その他に代表されるセント・オッグズの社会背景が、時にユーモアや皮肉を混えた客観的な描写によって outer circle を

形成していることである。それは彼女の知的觀察のみによるのではなく、かねて親しく見聞した地方社会を豊かな想像力によって円熟させ再生している所に inner circle との密接な結びつきが見られるのである。——長髪の海賊デイン人の来寇、ローマ軍隊の侵入以来、長い成長と経歴の跡が辿られるセント・オグズは、かつてのナポレオン戦争も只穀物の値上りという豊かな時代としてのみ思出される平和の中に、説教者が人間の魂を揺り動かすものとは久しく考えられず、宗教が慣例となり、教会と国家に関する英国憲法も、世界始まって以来のもので、その起源があるなど夢想だに出来ない。無知であることが今より遙かに気楽なもので、知識が無くとも立派に社会で優遇される。世俗的成功の福音に服し、安全と社会的地位を得ようと努め、物質の価値は卒直に認める。金銭的な裏付けがあれば、ある程度の平等が得られ、一面、勤勉で儉約、そして環境が許せば正直でもある。道德的観念も鞏固であるが、それは祖先伝来の固苦しい道德の範圍を出ない。万事が慣例、因習と体裁と上品ぶりに表わされ、<sup>34</sup>ヴィクトリア朝英国に増大しつつある中産階級を特徴づけるフィリスティニズムの克明な分析であると言える。のみならず、<sup>35</sup>ポルドー酒、ピロードの敷物、六週間も続く宴会の約束、オペラ、舞踊会等の催される贅沢な上流階級が、炭坑、工場等、悪臭、騒音、あらゆる肉体的労苦からなる窮乏した庶民生活の総てを必要とし、その上に成り立っているという鋭い觀察がある。Claude T. Bissell が言う如く、「ドドスン家の厳かな儀式、習慣を殆ど人類学者が土民の特性を記録する様な気持で描き、その筆致は適度に客観的であり、諧謔めいた所から辛辣な生真面目さに渉る皮肉によって生かされている」<sup>36</sup>のである。

その背景が彼女の親しく知っている社会、時代を離れ、只、知的追求によってのみ描かれるとか、或はその学識によって、偏った背景乃至は特異な問題に興味を示される場合、往々にして inner circle との結びつきが不充分となり、失敗する傾向にあると言える。後期の『ミドルマーチ』では、彼女の熟知した地方の町に帰り、この小説よりも社会背景は更に複雑化し、規模が大きくなり、深みを加え、その中に演じられる様々な劇の大きな outer circle として、その inner circle との緊密な結びつきが、彼女の最大傑作たらしめていると思われる。が、しかし、此処にビセルの「社会分析は、エリオ

ットの芸術の小間使であつて、女主人ではない。」<sup>(37)</sup>という一文を引用しておきたい。エリオット自らも言う様に、「私の役目は教義の先生ではなく、審美的な教師のそれである。——人類に社会正義を欲求させる様な気高い感情を起させることで、特別の方策を指令することではない。そんな事に関しては、芸術家は如何に強く社会的同情に動かされていたとしても、決して最上の判定者ではない事がしばしばであるから」<sup>(38)</sup>である。

この様な俗世間的因習に蔽われた索莫とした人間生活、蟻にも似たこれらの家庭からなる社会の、息づまる様な偏狭な感を与える環境が、マギーの心にどの様に働きかけるか。エリオットは、ノヴァーリスの「性格は運命なり」という箴言を引用して、しかし、必ずしも即運命ではないとし、ハムレットに言及して、人間生涯の悲劇は内部からのみ造られるものではないとし、性格の環境における経歴を重視している。<sup>(39)</sup>即ち上に述べた様な環境の中であつて、マギーが美しいもの、偉大なもの、崇高なものを得ようとする過程が描かれていると考えられる訳である。

その様な彼女の前に、かつて識りあつたフィリップ——それはタリヴァがその破産にからまつて、聖書にかけて復讐を誓つたウェイケムの息子——せむしで、病弱ながら、優れた学識と芸術的才能に恵まれ、女性的感受性を持ち、官能的な悦楽には嫌悪を抱いている極めて精神的なフィリップが再び現われる。レッド・デーブスの淋しい林の中で、兄に秘しでの出会いには、誠に清純なものがあり、二人の会話の中に、精神的な愛を告白するフィリップと、気迷いながらも彼への同情から、惹かれて行くマギーの心理が克明に描かれている。彼女の自己放棄、諦めの態度について、「君は狭い自己欺瞞の狂信に君自身を閉じこめている。それは君に備わっている最高の力を総て無力にし、それによって苦痛を逃れようとする態度に過ぎない。喜びや平和は忍従ではない。忍従は鎮められない、又、鎮められそうにもない苦痛に自ら進んで堪えることだ。——麻痺は忍従ではない。無知の状態にとどまっているのが麻痺である。——君の仲間の人達の人生が判る様になる道をすべて閉じてしまうことだ。」<sup>(40)</sup>と言ひ、それが自殺の状態だとする時、又、エリオット自身の代弁とも感じられる。が、結局、彼女には、この愛に犠牲があるならば、その犠牲故に、一層豊かな、満足のいくものであると感じるが、

やがて、それもトムの知る所となり、兄の態度を苛酷と思いつつも、諦めざるを得なかったのは、兄に対する裏切りという良心の苛責があったからである。

そして最後に「大きな誘惑」としてステイーヴン・ゲストなる人物が現れる。彼はセント・オッグズの町きつての豪商の息子で、マギーの従妹で、明朗、純真な美しいルーシーと当然婚約していいという間柄である。(其処にも又、ヴィクトリア朝的な口実が設けられている様に感じられる。) 教養もあり富もある、そして己の才能を誇示する都会風なダンディ(マギーは初対面の時、どちらかと言うとぬぼれ屋だと感じたが)はマギーのことを仲々きかぬ気の女性だと思いつつも、その才能と、一風変わった美しさに惹かれ、マギーも又、この青年に魅せられて行く。(因みに、第六部、第二章「第一印象」における両者の初対面の場はJ・オースティンの『誇りと偏見』のダーシーとエリザベスのそれを想起させるものがある。) 昔に変わらず精神的な愛を捧げるフィリップと、ルーシーの求愛者としての官能的なステイーヴンとの間にたゆたうマギーの心理の綾は、ステイーヴンから受ける誘惑が大きいだけに、その限りにおいて誠に克明、精緻であると言える。その一例として、同、第七章「フィリップ再訪」の中で、歌にことよせて、フィリップとステイーヴンが互いに相手の気持を探りあい、マギーの心の変化を読みとろうとする場面を挙げることが出来る。

処で、このステイーヴンという人物については様々な批評があり、レズリ・ステイーヴンは「エリオットは、ステイーヴン・ゲストなる人物に何というつまらぬ愚鈍な伊達者を描いていたか、自ら理解していなかった。彼女に男性が書けなかったという一つの例である。……私はこの魅力あるマギーが、場ちがいな、不調和な墮落のために身を滅ぼすことのない様にと心のうちで叫ぶのである。」<sup>(41)</sup> と言ひ、スウィンバーンは、「ステイーヴンは鞭打ちもなお有難過ぎる様な犬畜生だ。」<sup>(42)</sup> と言つたという歴史的な批評のあることを知る。又、エリオット自身、この小説の最後の部分について、「この悲劇は充分に準備されていない。……最初の二巻(三巻本のうち)の主題を愛する余り、私は所謂『叙事詩的広大さ』におちいつていたが、そのために第三巻の扱い方に均衡のとれた充実さを欠くことになった。そのことをいつまでも遺憾に思うで

あろう<sup>(43)</sup>』と言っているが、その中の「第三卷の扱い方に均衡のとれた充実さを欠くことになった」と言うのは、最後の悲劇の部分、即ち第七部「最後の救い」が十分に発展されておらないということであろうと思われる。その証拠に、彼女自身「……マギーのステイーヴンに対する立場は、この小説の構想なり目的全体のうちでも重大な部分であり、……もしこの部分で間違っているなら、即ち、マギーがこの様な事情のもとで如何なる行動をとるかが判っていないなら、この小説は書く可きものではなかったろう。もし書くとして、全く違った小説を書いたであろう。芸術上の倫理が本来気高いが、時に大きな過ちを犯しやすい人物を描き出すことを認めないのなら、芸術上の倫理は余りに偏狭であり、広汎になりつつある心理に応じてゆるめられねばならない。」<sup>(44)</sup>と言い、この部分には確信を抱いていた様に思われる。

しかし、最後の部分の失敗は、第六部「大きな誘惑」におけるマギーとステイーヴンに無関係のものではない。J・ベネットも言う様に、「彼女が遺憾に思うというのは、マギーとステイーヴンの挿話が圧縮されていることが誤った芸術表現の一因となっている限りにおいて、正しいものとされる」<sup>(45)</sup>であろう。ステイーヴンは、第六部において、それ以前（第三部、第五章）名前のみ一度言及されているだけで、始めてルーシーの求愛者として姿を現わし、彼の性格は他の人物に比較して、充分な発展過程が見られず、外部から描かれて共感されない。つまり、彼がマギーに与える魅力、誘惑が、彼女自身にとって絶大であるのに、読者にはそれ程感じられないということでもある。それは又、「自己抑制、自己犠牲がそのものとしては立派なものという信念にも拘らず、ステイーヴンの優しい心遣い、柔かな声に、彼女は再び明るい空想の世界に入ってしまった。が、それは寧ろ、以前に読み、彼女が夢見る様な思いに編みこまれた総ての詩や物語の中に、ぼんやりと入りまじった様々な影象からなる愛と美と喜びの程遠い世界が現に存在することを感<sup>(46)</sup>じた」と無関係ではない。リーヴィスの——かつて病床にある父の部屋で感じた盲目的な無意識な憧憬が、その後の知的発達にも拘らず、又意識感は与えられていながらも、結局、何であるかを知るに到らなかつたとし、ステイーヴンが彼女の精神的、理想主義的性質に応わしくないということをマギー自身自覚していない。この様なマギーの自己を知る事に欠けている点にエリ

オット自身の失敗を認めている説は、甚だ精妙適切なものがある。<sup>(47)</sup>

第六部の中から僅か二三の例を引いて見ても、「すべて彼女自身の意志を働かせているのでなく、抱きかかえて連れて行く許りのこの強い存在のなすがままにされる様な気持」<sup>(48)</sup>、「彼女の全身は喜悦と愛情の調べに調子を合わせていた」<sup>(49)</sup>、「あの強い不可解な魅力」或は、「彼女を思う彼の愛には何か恐ろしいものがあつた」<sup>(50)</sup>という、そのマギーとステイーヴンの愛は *sexual feeling* であることは、<sup>(51)</sup> *Lettice Cooper, Jerome Thale, Walter Allen* 等の指摘を待つまでもない。<sup>(52)</sup>

精神的な愛を捧げるフィリップと、全く対蹠的なステイーヴンとの間を考える時、後のハーディのテスを中心とするクレアとアレック、或は逆に、ジュードとシュエー、アラベラ、殊に、D・H・ロレンスの『息子と恋人』における、ポールを中心として、その母モレル夫人、及びミリアムとクレアラのテーマと殆ど同じと言って過言ではない。しかし、その扱ひ方が如何に異っていることか。それは、結局、マギーの道徳的選択にある。

先にも述べた、フィリップの愛情を圧倒する程のステイーヴンの魅力、誘惑に、マギーは心の中に幾度か負けそうになりながら、必死に逃れようとする感情の起伏、心理の綾の描写は、音楽、舞踊、ボート遊び、バザー等の各挿話の中に、その限りにおいて全く繊細克明であり、殊に第六部第八章で、ステイーヴンと只二人、一つボートに乗って、潮に流されるがままに、マギーの心が自然の流れに委ねられ、最後の選択を迫られる時、最も優れた描写であると言えよう。が、彼女の道徳的選択は、何よりも彼女の恐れる罪、背信と残酷な利己的行為、換言すればルーシーとフィリップに対する義務感にもとづくものであつた。他人を犠牲にして自分自身の幸福を求めてはならない。人生には諦めねばならぬ事がある。と感じ、結局、最も大きいと改めて痛感された最後の手紙の誘惑にも、マギーに長い過去が蘇って来ると同時に、彼女はかつてのトマス・ア・ケンピスの言葉を口誦む。しかし、その声が折からの雨にかき消されるのは甚だ象徴的である。エリオットがマギーにさせている道徳的選択は、いわば袋小路であり、堂々めぐりをせざるを得ないものである様に考えられる。それは先のステイーヴンの *sexual feeling* に対すると同様、そこでもヴィクトリア朝の道徳意識に従っているので



あり、後のハーデイが世論の圧迫を受けた事実と照しあわせ、彼女は己の筆に従って当時の則をこえることはなかった様である。つまり、世論の抑制ではなく、彼女に内在する自発的な抑制とも言う可きものが働いていた様に思われる。エリオットの考えは、寧ろ、マギーの崇拜するケン博士の意見に代弁されている。マギーに対して、「一番親しい肉親のもとへ帰りたい——貴女の生活のあらゆる絆が形づくられた場所にとどまりたいという気持こそ本当のものです」と言いながら、一人になった彼は、当事者すべての実際的な関係を考えると、結局、この二人が結婚するのが最も無難なのではないかと考えない訳にはいかない。——が、その反面、精神の苦闘を知り、長年献身的奉仕の生活をして来た人として理解し得る限り、ステイーヴンとの結婚を承諾することがマギーには神聖を瀆すものと思われる、その感情と良心とを酌みとってやり、やはり、彼女の良心に干渉してはならない。ルーシーやフィリップとの従前の関係を取り戻そうと努めてみても、或は、突然わりこんで来た愛情に従う様忠告しようとして見ても、いずれも、そこから生じそうな結果は全く判らない。それに、そのいずれにも一歩踏みこんでも、直ちに不都合が生じて一層見通しがつかなくなると考える。

ケン博士のこの様な意見のあと、エリオット自身、「情熱と義務の間をたゆたう関係という大問題は、それを理解している人にも明瞭ではない。少しでも効果のありそうな自制も、すでに遅くなってしまい、これまで罪と違って反抗して来た情熱の力に従わなくてはならない時が、果して到来したかという問題は、総てにあう合鍵では解決出来ない問題である。詭弁家が細かく識別しようとする偏った精神は、我々には余り気付かれない一つの真理を仄めかしている。即ち、道徳的判断は個人の運命を形づくる特殊な事情を絶えず考慮して、それによって抑制されたり啓発されたりしなければ、やはり偽りで無意義である」と評しているが、<sup>54</sup>いずれも充分な展開を見ていない。寧ろ、彼女の迫られた道徳的選択の今一つの方向に一歩踏みこんで、たとえそこに不都合な事が起って来ようと、見通しもつかぬというその行為の結果を自ら負う、その精神葛藤、道徳的負担とその心理の追求にこそ、更に新しい要素が見られたのではなからうか。

道徳問題にからまる心理の追求は、一部、『フィリップス・ホールト』のトランサム夫人、『ミドルマーチ』の、例え

ば、ドロシアのカソーボーン及び、その従兄弟ウィル・ラディスロウに対する、或は又、『ダニエル・デロンダ』のゲンドウレン・ハーレスのヘンリー・グランドコートに対する心理描写に、更に深まりを見せていると言えようが、その後のヘンリー・ジェイムズ、コンラッドの作品のそれへの発展の萌芽を持っていると考えられる。

最後に、フロス河の氾濫のために、トムとマギーが相抱いて死ぬという結末は、それまでに、マギーが河に落ちて死ぬかも知れないとか、氾濫への言及、或はその他死のイメージが用意されているにも拘らず、唐突の感を免がれ得ない。テスやジュードの最後が自然である様に感じられるに反して、そして又、『アダム・ビード』において、ヘティ・ソレルが死刑になろうとして危く助かるという、生と死と全く反対の解決でありながら、やはりヴィクトリア朝的解決と言わなくてはならない。それは先にも述べたマギーの道徳的選択が十分な進展を見せなかったということと表裏の關係にあると思われる。つまり、先の道徳的選択が首肯される限りにおいて、この結末も又、首肯されるのではなからうか。逆に言うならば、エリオットは、すぐれた知性と何よりも愛情への憧憬、鋭い感受性と豊かな想像力に恵まれたマギーにとって、セント・オッグズの町という俗世の環境の中に、美しいもの、偉大なもの、崇高なものが如何に得難いかを示し、最後までマギーを高貴、清純な女性として表現したかったのだと思われる。その意味で、この結末は一種のカタルシスを与え、フロス河にこの悲劇を統一するものを見ることが出来る。そして、このフロス河に幸福はよくないもの、諦めはそれ自体よいもの、という乙女らしい信念をもったマギーを葬ることによって、ジョージ・エリオットが誕生したのだと言えるのではなからうか。

(本稿は昨秋、京都大学英文学会シンポジウムで発表した草稿をもとに一部書き改め、加筆したものである。)

注

(1) F. R. Leavis: *The Great Tradition*, p. 5.

(2) Lord David Cecil: *Early Victorian Novelists*, p. 213. (Pelican

- Books), Cf. *Ibid.*, p. 218. (3) F. R. Leavis : *op. cit.*, pp. 5-13. (4) *Ibid.*, p. 85. (5) Basil Willey : *Nineteenth Century Studies*, pp. 204-5. (6) Walter Allen : *The English Novel*, pp. 208-9. (7) Joan Bennett : *George Eliot*, p. x. (8) Virginia Woolf : *The Common Reader I*, p. 213. (9) ネット・ウォルトンの一節を引用して「*mature*」が抜けてしまふのは重大な脱落である。 (10) 'The Sad Fortunes of the Rev. Amos Barton', ch. v. *Scenes of Clerical Life*. (11) Basil Willey : *op. cit.*, p. 244. G. S. Haight (ed.) : *The George Eliot Letters*, Vol. III, p. 111. (12) ルイ・カザミアン、石田・白田訳『イギリスの社会小説』三八三—四頁。 (13) 'The Sad Fortunes of the Rev. Amos Barton', ch. v. (14) Joan Bennett : *op. cit.*, p. 106. (15) G. S. Haight (ed.) : *op. cit.*, Vol. III, p. 302. (Miss Mulock は同時のミス・ナ・ヘラー John Halifax, Gentleman の著者、後の Mrs. Craik による、その批評家がエリオットをライヴァルと見てたゞのうらやまの一節。 ) (16) 以下伝記の部分は、ネット・ウォルトンに負う所が多い。 (17) G. S. Haight (ed.) : *op. cit.*, Vol. I, pp. 120-1. (18) Joan Bennett : *op. cit.*, p. 28. G. S. Haight (ed.) : *op. cit.*, Vol. I, p. 122. (19) Joan Bennett : *op. cit.*, pp. 122-3. (20) Basil Willey : *op. cit.*, p. 204. (21) *Ibid.*, p. 205. (22) *Ibid.*, pp. 246-7. (23) T. S. Eliot : *After Strange Gods*, pp. 53-4. (24) Joan Bennett : *op. cit.*, p. 32. (25) Basil Willey : *op. cit.*, p. 207. (26) Walter Allen : *op. cit.*, p. 210. (27) Cf. Basil Willey : *op. cit.*, p. 207. (28) E. Legouis and L. Cazamian : *A History of English Literature*, p. 1216. (29) *The Mill on the Floss*, bk. 1, ch. iv. (30) *Ibid.*, bk. 1, ch. v. (31) *Ibid.*, bk. iii, ch. v. (32) *Ibid.*, bk. iv, ch. iii. (33) Joan Bennett : *op. cit.*, p. 101. (34) *The Mill on the Floss*, bk. 1, ch. vii. ch. xii. bk. iv, ch. i. (35) *Ibid.*, bk. iv, ch. iii. (36) C. T. Bissell : "Social Analysis in the Novel of George Eliot", A. Wright (ed.) : *Victorian Literature, Modern Essays in Criticism*, p. 164. (37) *Ibid.*, p. 168. (38) ルイ・カザミアン、石田・白田訳『前掲書』三八三—四頁。 (39) Cf. G. S. Haight (ed.) : *op. cit.*, Vol. VII, p. 44. (40) *The Mill on the Floss*, bk. vi, ch. vi. (41) *Ibid.*, bk. v, ch. iii. (42) F. R. Leavis : *op. cit.*, p. 40. (43) Walter Allen : *op. cit.*, p. 216.

- ④③ G. S. Haight (ed.) : *op. cit.*, Vol. III, pp. 317-8. Cf. Joan Bennett : *op. cit.*, p. 81. pp. 115-6.
- ④④ Joan Bennett : *op. cit.*, p. 81.      ④⑤ *The Mill on the Floss*, bk. vi, ch. iii.      ④⑥ F. R. Leavis : *op. cit.*, pp. 41-3.
- ④⑧ ④⑨ ④⑩ *The Mill on the Floss*, bk. vi, ch. viii. ch. x. ch. xi.      ④⑪ Lettice Cooper : *George Eliot*, p. 22.
- ④⑫ Jerome Thale : *The Novels of George Eliot*, p. 52.      ④⑬ Walter Allen : *op. cit.*, p. 216.
- ④⑭ *The Mill on the Floss*, bk. vi, ch. ii.